

READ ME

大東文化大学 大学院 文学研究科 英文学専攻 現在在学中
橋本 達也さん (2020年3月卒業)

英米文学科に入ってから、すぐやるべきことは？

「先生方の名前を覚える」

英米文学科に限らず全ての学部生に言えることですが、自分の履修している教科を担当している先生方の名前は、できるだけすぐに覚えましょう。特に英米文学科の必修の授業では先生方とコミュニケーションを取る場面が多くあります。授業は学力を身につけるだけでなく社交性を身につける場でもありますから、このような基本的なマナーは第一に覚えるべきことです。

先生方も自分の名前を覚えてもらえていると嬉しいものですし、「この学生は下準備のできる人だな」という印象を持たれるはずですよ。それだけで良い先生方と皆さんの人間関係を良い形でスタートできます。

前期の授業が開始される前から履修登録した授業を担当している先生方の名前を確認し、初回授業から先生との会話の中で先生の名前を呼べるようになればベターです。

「字を綺麗に書く」

英語・日本語問わず字は綺麗に書きましょう。授業では出席カード、提出物、テスト用紙などで、自分の名前と学籍番号や所属学科名などを書くことが非常に多いです。この際、自分以外の人たちに読み取れないような汚い字では、先生も名前や学籍番号をしっかりと確認できず困ってしまいます。特に英語表記で自分の名前を書く際は要注意！筆記体は書く人の癖が強く反映されるので、eなのかlなのか、gなのかyなのかわからない場合もあります。綺麗に書ける自信がないのなら使わないようにしましょう。活字体で書く際も、aとd、rとv、fとtはしっかり書き分けるように注意しましょう。手書きのレポートやテストの場合でも前述の注意点を念頭に置いて、しっかりと誰が読んでも判別できる字を書くよう心がけてください。

字の綺麗さは性格の几帳面さが顕著に反映されます。そしてラフで読みづらい字は、読む人にズボラな性格を連想させるだけでなく、読む人を困惑させてしまいます。もちろん自分だけが確認するメモを取るときは、「自分の字の書き方」で一向に構いません。しかし皆さんが「普通」だと思っている「自分の字の書き方」が、一般的に読みやすい書き方だとは限らない可能性もあります。辞書や印刷物に用いられている字体から確認するなどして、客観的に見て誰で

も判別できる字の書き方をできるだけ早く身につけておくようにしましょう。

どれほど PC・スマートフォン・タブレットが普及して、手書きで字を書くことが減っても、社会では手書きで名前や住所を書く機会があります。綺麗に字を書く習慣を身につけることができれば、その習慣は必ず社会に出たあとも役に立ち、周囲の人々に評価されます。

だいたい何をいつするのか ー四年間のスケジュールー

一年生時は基礎学習の時間。英米文学科では英米文学作品や映像作品、海外のニュースを読んだりして、それをレポートにまとめて提出することが多くあります。期末試験の内容は先生によって特色があり、筆記テスト、レポート提出、英語でのコミュニケーション能力を試すテストが多いですが、中には学生が自分たちでストーリーを作り、役者となる演劇を期末試験とする先生もいます。英語力は中高生レベルでもまだ問題ありませんが、当然ながら英米文学科の必修・選択授業は英語を用いた期末試験が多いので、それぞれの授業ごとにしっかり英語力を身につけるよう意識しましょう。一年生時に英語力がステップアップすればするほど、二年生時以降の授業内容が理解しやすくなります。

もちろん文学部では必修の体育や情報処理での学習も大切。体育では運動だけでなく異なる学部の学生と接することでコミュニケーション能力を高めることも授業の目的のひとつです。情報処理では大学の授業だけでなく、社会でも必要とされる Word や Excel、Power Point のスキルを身につける時間となります。

二年生時は一年生時に比べ、英語力や文学作品への読解力を試す必修授業がさらにレベルアップ。一年生時に真摯に学業に勤しんだ学生は、これらの授業でその能力を大いに発揮できます。さらにグループを組みディベートを繰り返し、その結果を発表する機会が増え、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を高める授業が多くなります。

また必修以外の授業が一年生時より多く取れるようになるのも二年生時の特色。英語や英米文学作品だけでなく、自由科目で様々な分野の授業を履修できます。大学は幅広い知識を身につける場所ですから、自分にとって有益だと考えられる授業も積極的に履修しましょう。

二年生時後期になるとゼミナールの希望書を提出することになります。ゼミナールは三年生時の一年間でひとつの分野を集中して学ぶ時間です。どの先生がどのようなゼミナールで、どのような分野を扱っているのかを熟考した上で決めましょう。もし希望のゼミナールを担当している先生のことをよく知らないなら、別のクラスの友達や先輩、他の先生方に尋ねてみましょう。

三年生時は自由科目がほとんどなく、英米文学科専門の選択授業がほとんどになります。選択授業の特徴は、それぞれ細分化された分野に特化した授業が多いということ。文化、語学、詩、映画、児童文学、ジェンダー、芸術など、それぞれ独立したひとつのジャンルを集中して学んでいくことになります。履修登録前に、自分は文学と語学のどちらを重点的に学びたいのか、そしてどのようなジャンルを知識として身につけ活かしたいのかを考慮しておきましょう。

ゼミナールは三年生時の学生生活でも中心的な授業となります。他の授業より学べることの密度が濃く、教室外での活動もありますので、是非履修してください。(詳しくは「履修の組み方」の<ゼミナール>を参照)

後期になると卒業論文を履修するか否かを決めなければなりません。履修する場合、このときまでに担当して頂く先生と自分の取り上げたいテーマが決まっていると、四年生時は円滑に卒論制作が進みます。テーマは四年生時でも変えられるので、テーマの決まっていない学生は仮のテーマを決めましょう。

四年生時での学習も英米文学科の各専門分野を授業で学んでいくこととなりますが、最大のハイライトは卒業論文となります。

卒論制作の全体の流れは以下ようになります。

1. 自分が卒論で取り扱うテーマとそれに関する持論を担当の先生に説明する。
2. 専攻研究を探し、既存の学説を学ぶ。
3. 卒論制作をする時間を自分で決めながら、持論を文章にしていく。
4. 先生に添削して頂き、自分の論文に矛盾点がないか等の指導をして頂く。

基本的には2.から4.を繰り返す工程になりますが、4.をする日程の決め方は先生によって異なります。毎週教室や研究室で指導を行う先生もいれば、個人的に連絡を取り合って指導の日程を決める先生もいます。制作途中で卒論のテーマを変更する場合は、1.からやり直すこととなります。

履修の組み方

<必修科目>

卒業する上で必ず履修し、単位を取得する必要がある科目。英米文学科では語学・文学・文化系の授業だけでなく、以下の教科も必修科目に含まれます。

1. 体育

高校の体育の授業のように複数のスポーツを行う訳ではなく、ひとつのスポーツを扱う教科を履修します。例えば、バスケットボールを扱う教科を前期・後期で履修すれば、一年間体育の授業でバスケットボールを行うこととなります。中高生時代に運動系の部活を続けた人は同じ種類のスポーツを扱う教科を取っても良いですし、全く新しいスポーツにチャレンジするのも良い経験となるはずです。スポーツは集団で行うものですから、協調性とスポーツマンシップをしっかりとって楽しみましょう！

2. 情報処理

PCを用いて Word、Excel、Power Point など、Microsoft Office の使用法の学習が基本となります。これらのソフトウェアは授業で頻繁に用います。社会人になったあとも会社の事務仕事等で使うこととなりますから、将来のためにもしっかり学習し身につけましょう。

Microsoft Office は大東文化大学の学生なら誰でも無料で自分の PC にインストールでき、在学中は無料で使い続けることができます。授業の内外問わず有効に活用してください。

3. 第二外国語基礎

ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語の四種類の第二外国語基礎の中からどれかひとつを履修して単位を取得する必要があります。各言語には以下のような特色があります。

ドイツ語…文法は複雑ながらも英単語に類似した単語、あるいは発音と綴りがほとんど同じ単語が多い。男性名詞・女性名詞だけでなく、中性名詞があるのが特徴。英語と同じくゲルマン語派に属する。

フランス語…英単語に類似した単語でも語尾を発音しない等、音声的に特徴がある。フランスは歴史的に最も英語の発祥地イギリスと繋がりが強い国であるため、英語はフランス語由来の単語が多い。

スペイン語…日本語とほとんど同じ音で単語を発音する。日本人はスペイン語を発音しやすく、スペイン人も日本語を発音しやすい。フランス語同様にスペイン語由来の英単語も多い。

中国語…漢字を使った言語ながらも、語順は日本語よりもむしろ英語に近い。

英語と同じ声調言語に属するが、発音の種類は 400 個以上に及ぶ。日本では英語に次いで需要の高い言語。

以上のどの言語にもそれぞれ固有の文法的・発音的難しさがあるため、どの言語が最も簡単で最も難しいのかは定義できません。学習の意欲によって習得のスピードが変わることは、英語の学習と同様です。

各言語で各国の文化や歴史を学ぶことも第二外国語の授業の特徴です。好きな国の言語を選んで履修したら、その国のことを学ぶことにもなりますから、どの第二外国語が自分に向いているか判断できなければ、好きな国や興味のある国の言語を選んでもよいでしょう。

<自由科目>

全学科の学生が履修できる科目。英米文学とは全く関係のないと考えられる分野でも、学べば英米文学や語学と関連付けられることは沢山あります。興味のある分野や自分に役立ちそうだと感じた分野を扱う教科は積極的に履修しましょう。

<演習科目>

三年生時から履修できる科目。主にグループを組み、授業で学び研究したことをレジュメにし、それを配布した上で研究結果を発表します。

例えば「英語学演習」では標準英語（英語圏で使われる一般的文法を用いた英語）と非標準英語（訛りや定型的ではない文法を含む英語）をまず学び、グループでそのことに関する調査をし、まとめてレジュメにし、それを配布してその内容を黒板またはホワイトボードを使いながら口頭で説明した後、質疑応答を行う…といった演習を行います。

演習科目では学習や研究はもちろん、グループ内でのコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の向上を目的とした科目ですので、グループで協力して積極的に発言しながら調査と研究を進め、大きくはっきりとした声で発表しましょう。グループのメンバーは学生が自分たちで決める場合もありますが、先生が決める場合もあります。全く話したことの無い学生ともグループを組むこともありますので、協調性を持って新しい信頼関係を築くことが大切です。

<ゼミナール>

ゼミナールの授業方法や内容は先生によって全く異なります。二年生時にどのゼミナールの先生がどのような内容と方法で何を研究しているかをよく確認し、履修するゼミナールを選択してください。また定員オーバーとなったゼミナールは履修できない可能性がありますから、第二希望のゼミナールもよく考えて決めてください。

ゼミナールは三年生時に最も重要で、後に最も良い思い出にもなる授業です。一年間を通して担当する先生の扱う分野を深く考察し、ゼミ仲間と協力して学習や発表を行うことで、社会で必要とされる人材となるために不可欠な思考力や発想力、協調性や自主性が最も培われることとなります。非常に大切なことは、集団意識と自分をそのゼミナールの一員だという自覚を持つこと。ゼミナールは一、二年生時の必修とはまた異なる次元での授業となるため、自分が孤立してしまっては学習についていけなくなってしまうかもしれません。積極的にゼミ仲間をつくり、もし孤立している学生がいたらゼミ仲間の一員になれるよう声をかけてあげましょう。学習以外にも合宿や飲み会があるのもゼミナールの特徴ですから、このような場でゼミ仲間と仲間意識を作りあげるのも大切です。ゼミナールで出会い共に学んだ仲間とは、四年生時以降も良い関係を続けられる傾向があり、ゼミナールに在籍していたことそのものが良い思い出となることもあります。是非集中して楽しみながら学習してください。

外国人の先生に対するマナー

まず各外国人の先生の出身国を覚えましょう。ほとんどの外国人の先生は初回授業で自分の出身国や出身地（州）を紹介します。日本の中学・高校では主にアメリカ英語を学びますが、大東文化大学の英米文学科ではイギリス人やカナダ人の先生も沢山います。英語は国によって訛りや方言が沢山ありますが、特にイギリス英語はアメリカのものとは全く異なる単語があったり、発音やイントネーションも異なる場合が多いです。

例えば日本語の「ガソリンスタンド」はアメリカでは”gas station”と言いますが、イギリスでは”petrol station”と言います。「持ち帰り」はアメリカでは”takeout”と言う一方、イギリスでは”takeaway”と言います。

発音に関しても、アメリカではrを巻き舌で発音するため、”car”は「カール」のような発音になりますが、イギリスでは巻き舌はせず「カァ」のような発音になります。カナダにはケベック州というフランス語が公用語の州もあるので、カナダ人の先生にはフランス語訛りの英語を話す先生もいます。

日本の学校教育でアメリカ英語を学ぶからといって、全ての外国人の先生が

授業でアメリカ英語を話す訳ではありません。今まで学んできたアメリカ英語の単語や発音に自信があっても、他の英語圏出身の先生にはそれが通用しない場合もあります。先生の出身国に応じて様々な国の英単語や英語表現、発音を学ぶことは先生とのコミュニケーションを円滑にするだけでなく、TOEICのような多様な英語圏の英語が出題される資格試験でも役に立ちます。先生方の出身国を知った上で、その国の英語を学び話すことは、自分の英語力を国際化させるということです。「〇〇の国の英語は苦手だから」といった理由で学習を諦めず、是非自分の英語力の守備範囲を拡大するつもりで色々な国の英語を学んでください。

第二外国語の先生が外国人の場合でも同様です。例えばドイツ語話者の先生がドイツ出身ではなく、オーストリア、スイス、リヒテンシュタインなど他のドイツ語圏出身の可能性もあります。

次に、映画やドラマで使われるような失礼な表現は、授業では使わないでください。海外映画やドラマで登場人物が”f**k” や ”s**t” のような汚い言葉を口にするシーンを沢山見て、当然のように用いて良いと勘違いしている学生が稀にいますが、どの国でも授業やビジネスの場では絶対に言葉にしてはいけない単語です。ましてや先生に向けて言うなど言語道断です。そのような行為は先生との関係を悪化させるだけで、何の利益にもなりません。

最後に、授業での先生との会話はなるべく英語でしましょう。日本語を話せる先生もいますが、外国人の先生の授業は英語で行うのが基本です。語学は文学に並んで皆さんが英米文学科で最も学ぶべき分野ですから、自発的に英語で先生に話しかけるようにしてください。その話しかけるという行為自体が皆さんの性格をより積極的な性格にし、同時に英語力の向上を手助けします。もし授業中に先生に話しかけることが恥ずかしいと感じたら、授業前や授業後でも構いません。授業の内容や宿題の趣旨がわからないことがあったら英語で質問してください。その度に皆さんの英語での会話力と理解力が上がり、先生の皆さんに対する評価も上がります。会話中に単語や文法的な間違いをしても心配したり恥ずかしがる必要はありません。先生方はその間違いを正して、皆さんの英語力を改善してくれます。先生と話す時間は授業だけではなく、メールでやりとりしたり、中には昼食の時間を一緒に過ごしてくれる先生もいます。

空きコマの使い方

「空きコマ」とは授業を取っていない時間のことで、例えば三時限目と五時限目は何か教科を履修して授業に出席しているけれど、四時限目は何も教科を履修していないため授業もない場合、その四時限目を「空きコマ」と言います。空きコマは休講とは違い、履修登録の段階で皆さんが決めた時間割によってできるため、毎週その日のその時限は授業がない状態になります。

空きコマは授業に出る必要がないため自由に行動できます。主な空きコマの使い方の例は以下のようになります。

1. 自習・課題

図書館などで自分のための学習や、与えられた課題をこなすために空きコマを使いましょう。図書館ではPCが使えますから、Microsoft Officeを使用する課題も行えます。

2. 食事を取る

一時限目から五時限目以降まで学校にいる場合、ランチタイムに昼食を取っただけでは五時限目以降に空腹となり集中力を失ってしまうかもしれません。あまりにお腹が空くようなら、空きコマを利用して食事を取り、五時限目以降の授業に備えましょう。

上記以外にも図書館での映画鑑賞やトレーニングルームでの運動など、校内で行えることは沢山ありますが、空きコマの間だけ自宅に戻るという場合は注意してください。自宅に戻ると次の授業へのモチベーションが下がって欠席してしまう学生もいます。

卒業論文をなぜ書くのか？

英米文学科では卒業論文は必修ではありません。だからといって価値がないものというわけではなく、皆さんにとって非常に意義深いものです。

卒論は文字通り文学部英米文学科で培ってきた四年間の集大成です。学んできた文学、文化、語学に関する知識と、身につけてきた文章表現能力と発想力の全てを卒論に集約すると言っても過言ではありません。卒論を書くということは、「自身が研究者となって新しい発想を提唱する論文を書く」ということで、同時に「著者として一冊の本を作る」ということです。それまでのように与えられたテーマについて考察や要約をするのではなく、自分を取り上げたいテーマを熟考した上で新しい説を提唱することが卒論の趣旨です。学術的かつ時間

的なハードルは授業でのレポートやレジュメを遥かに上回りますが、完成後の「卒論を書き上げた」という自分に対する自信と、卒論そのものの価値もまた非常に大きなものとなります。自分にしか書けない論文を書き上げたという自信は確実に社会に出た後も自分を支えてくれるでしょうし、卒論自体は大学時代に培った自分の能力を示すための本という物理的な証拠として役立ちます。

英米文学科では卒業論文は必修ではありませんから、就職活動や資格の勉強があまりにも忙しいと予測されるようならば、履修しないという考えも間違いではありません。しかしきちんとスケジュールを立て、担当の先生と頻りに連絡を取り定期的に添削して頂くように努めれば、忙しい中でも卒論制作は進んでいきます。「自分にはできそうにない」と最初から決めつけるのではなく、まずは皆さんが自分で何を学んで何について論じたいかを考えて、それを先生に説明してみましょう。

卒業してからの進路

卒業してからの進路は大別して就職と進学のみとなります。

<就職>

具体的にどのような職に就きたいかまでは考えなくて構いませんから、大まかにどのような分野で自分が活躍したいか、または活躍できるかを、一、二年生時から考えてください。

例えば英語力を身につける意欲があつて文章表現が得意な人は、出版社勤務、ライター、ジャーナリスト、翻訳家、小説家など、自分の能力を生かせる分野での仕事を考えます。もちろん、アルバイトの経験から自分に向いている職業を考えるのもひとつの方法です。アルバイトの接客を通して、お客さんとの会話の楽しさや、お客さんの役に立つ喜びを感じるようなら、就職先も接客業が向いているかもしれません。公務員を目指す場合は一年生時から公務員試験の勉強を開始してください。公務員試験は専門試験と教養試験を合わせると科目数が非常に多いので、対策用の参考書を用いて可能な限り勉強してください。

三年生時にはインターンシップがあります。就職採用の確立が高まる可能性もありますから、就職を希望する会社のインターンシップには積極的に参加してください。

四年生時は、人によっては学業よりも就職活動に費やす時間が多くなります。インターンシップ先からすぐに内定をもらえる場合もあれば、中々採用されず四年生時の一年間のほとんどを就職活動に費やす場合もあります。

以上の過程を経て就職活動が終了すると、卒業後に就職となります。就きた

い職業に就けるとは限りませんが、努力次第で自分の能力を活かした職業に就けるはずで、大学での四年間で学んだことを、就職活動中も就職後も活かせるよう頑張ってください。

<進学>

進学は主に大学院への進学があります。

大学院に進む場合は大東文化大学大学院への進学と、他大学の大学院への進学があります。どちらの場合も一般入試で受験できますが、推薦入試の場合は大東文化大学大学院への内部進学のみになります。

一般入試の英語試験、筆記試験、面接試験から成る入試方法です。推薦入試は課題提出、卒論の写し（あるいはそれにかわる論文）、面接試験から成る入試方法で、大学での授業成績の60%以上がA評価以上でなければ出願できません。どちらの場合も必要となるのが研究計画書で、大学院進学後に自分が何を研究したいか、どの先生に担当して頂きたいかを述べる文書です。

大学の学部は先行研究を「学ぶ」ことを目的として授業を受けることが多いですが、大学院の研究科はある分野を「研究」することを目的とし、既存の先行研究にはない研究成果を発表する場です。大学で培った考察力や創造力を発揮する場所でもありますから、大学院進学を目指す学生は大学での四年間でしっかり研究したい分野を学習してください。

なお、大学で専攻していた学部学科とは異なる分野を扱う研究科へ進学することもできます。例えば、大学では文学部英米文学科を専攻し、大学院では経済学研究科経済学を専攻することもできます。

また大学院には修士課程・博士課程前期、博士課程後期があります。修士課程・博士課程前期を修了することで修士号を授与され、後に博士課程後期を修了することで博士号を授与されます。

クラスでの人間関係に困ったら

英米文学科では一年生から二年生まで、必修の授業をひとつのクラスで行います。男女比はたいてい5:5となりますが、男女で仲が良いクラスもあれば、悪いクラスもあります。年齢もクラスメイト全員が同じというわけではなく、浪人や経済的な理由などで大学入学が遅れたクラスメイトは年齢に差があります。学力や学習の意欲も学生によって様々です。性別や年齢、学力だけでなく、それぞれ人との接し方や価値観も異なる学生が集まってひとつのクラスができるわけですから、クラスメイトとの間で摩擦が生じ、人間関係に悩む時期があるかもしれません。そのような場合は、悩みを自分の中だけに閉じ込めず、必ず

周囲の信頼のおける人に相談してください。

授業でクラスメイトとの人間関係が辛いと感じ、そのせいで授業に集中できないと感じたら、**Freshman seminar**をはじめ各必修授業を担当している先生に相談してください。そしてもし改善策が考えられるようなら、それを先生に提案してください。先生方は必ず皆さんの悩みに耳を傾け、提案を考慮し、より良いクラスになるよう策を講じてくれます。稀に先生を敵対視している学生がいますが、先生方は決して敵などではなく、皆さんの成長と学習を助け、悩みを解決してくれる強力な味方です。

先輩に相談してみるのも良い方法です。皆さんの先輩たちは過去に同じ経験をしている場合が多く、過去に直面した問題をどう処理したかという先輩たちからの情報は、必ず皆さんの役に立ちます。違う学年ながらも同じ学生として先輩たちがどう乗り越えてきたかを知ることが、そのまま皆さんの悩みに対する答えになる可能性もあります。年上だからとか、学年が上だからという理由で先輩を敬遠する必要はありません。先輩は皆さんにとって怖い存在ではなく、優しさを持ってアドバイスをくれる存在です。

三、四年生になったら、今度は皆さんが後輩の一、二年生に助言を与えてください。皆さんが先生や先輩から助けてもらったことと同じように、皆さんも後輩に手を差し伸べてあげてください。たった一言のアドバイスでもその後輩の悩みを解決できたり、そのことがきっかけとなり、その後輩のいるクラスの人間関係を改善することができるかもしれません。

悩みながらも良好な人間関係を築くという努力は、後に社会でも必要となります。そのときに必要なのはひとりで悩むということではなく、誰かに相談したり、悩みの辛さを共有してくれる人とアイデアを出し合うということです。自分のクラスをひとつの社会だと捉えて、悩みを放置せずに解決策を実践できる人になれば、大学を卒業したあとも様々な場所で良好な人間関係を築ける人へと成長できるはずです。